

# 大麦管理情報 (第9号)

## 1 気象経過

- (1) 4月上旬の平均気温は8.7℃(平年差-1.4℃)と低く(図1)、降水量は52.5mm(平年比115%)と多かった(図2)。日照時間は44.5時間(平年比78%)と少なかった。
- (2) 4月中旬の平均気温は12.0℃(平年差-0.1℃)と平年並み(図1)、降水量は15mm(平年比39%)と平年より少なかった(図2)。日照時間は70.5時間(平年比129%)と平年より多かった。

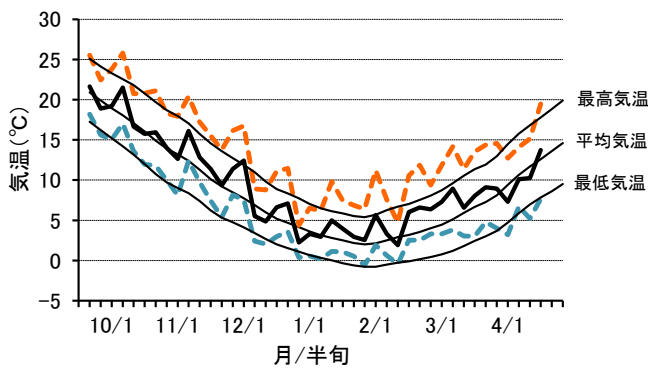


図1 気温の推移 (富山地方気象台・観測地点富山)

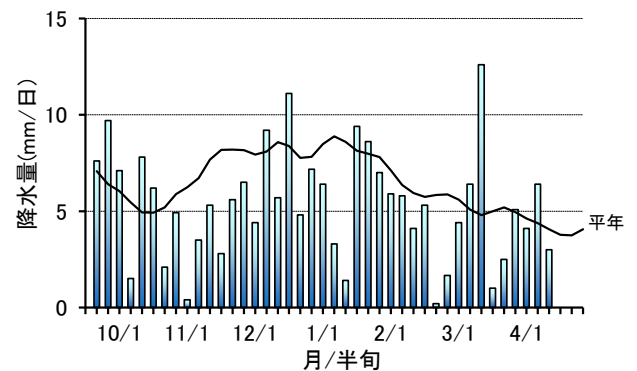


図2 降水量の推移 (富山地方気象台・観測地点富山)

## 2 生育概況

- (1) 草丈は、平年よりやや長く(平年差+3.7cm)、茎数は、平年並み(同+13本/m<sup>2</sup>)、葉色は、平年よりやや濃く(同+3.3)になっている(表1、図3、図4)。
- (2) 穂長は、平年並み(平年差-0.2cm)となっている(表1)。
- (3) 出穂期は、4月14日(平年差-8日)と早くなった(表2)。

表1 大麦生育観測ほ等調査結果(4月25日)

(播種様式:ドリル)

	播種日 (月/日)	苗立数 (本/m <sup>2</sup> )	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	穂長 (cm)
				(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )			
31年産	10/8	178	82.9	2.7	470	13.6	48.8	4.4
30年産	10/5	197	84.6	1.9	377	13.4	46.3	4.5
平年	10/6	176	79.2	2.6	457	13.3	45.5	4.6

注) 平年は21~30年産の平均。30年産と平年は5月1日の値。

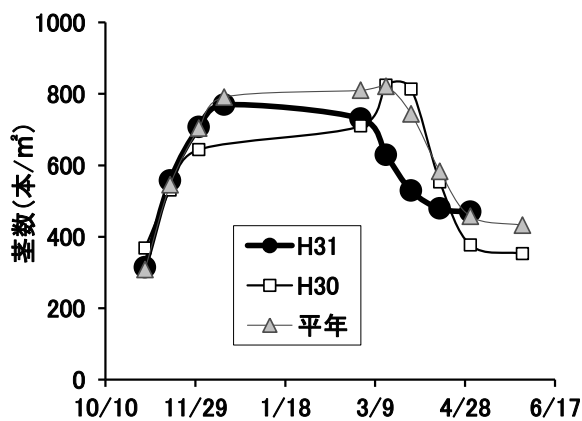


図3 茎数の推移

注) 平年は21~30年産の平均

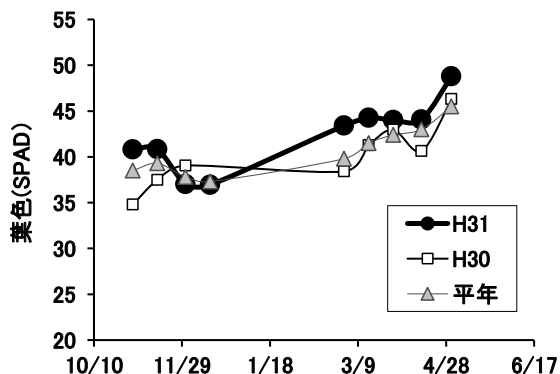


図4 葉色の推移

注) 平年は21~30年産の平均

(4) 成熟期は、地域による差が見られるが、4/25以降の気温が平年並みで推移した場合、県平均で5月30日頃と見込まれる。

4/25以降の気温が平年より+1℃高く推移した場合の成熟期は5/29の見込み。

表2 生育ステージの見込み(4月25日現在)

	止業 展開期	出穂期	成熟期
31年産	4/1	4/14	(5/30)
30年産	4/13	4/23	6/3
平年	4/11	4/22	6/3
(参考)28年産	4/1	4/11	5/28
(参考)21年産	4/2	4/13	5/30

注1) ( ) は見込み

注2) 31年産の成熟期は4/25以降の気温が平年並みで推移した場合(積算気温774℃)の予測日

注3) 平年は21~30年産の平均値

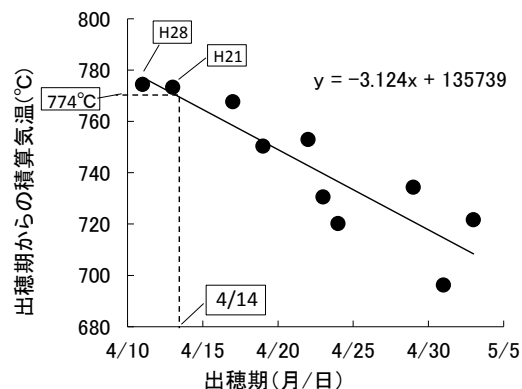


図5 出穂期と積算気温の関係

注) H21~30年産 生育観測ほの平均値

積算気温は富山気象台の日平均気温を使用

### 3 当面の技術対策

#### (1) 赤かび病防除の徹底

- ①ほ場ごとの出穂状況に応じて、穂揃期(開花始め)とその7日後の2回を確実に実施する。
- ②週間予報では期間のはじめは曇りや雨の日が多いことから適期に散布することを優先し、短い晴れ間を利用して、確実に防除を実施する(図6)。
- ③無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。
- ④防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。

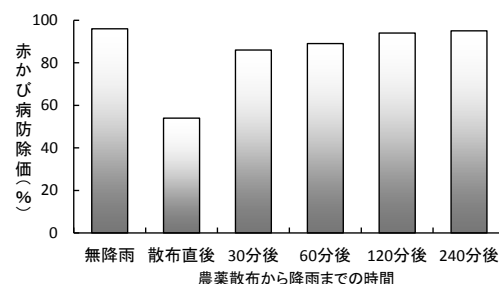


図6 農薬散布から降雨までの時間が防除効果に及ぼす影響

注) 防除薬剤: トップジンM水和剤

降雨は強い雨(25mm/h)を2時間継続して実施(農研機構九州沖縄農業研究センター)

#### (2) 排水対策

用水路や隣接田から漏水がないよう水口や畦畔を点検するとともに、排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底し、湿害を確実に回避する。

### (3) カラスノエンドウ種子等異物の混入防止

- ① 実需者から、異物混入防止の徹底を求められており、特に、カラスノエンドウの種子（粒径3mm程度）の混入防止が重要である（写真1）。
- ② ほ場内に侵入してからの除去は労力を要するため、ほ場周辺でカラスノエンドウを見かけたら速やかな除去に努め、ほ場内に侵入した場合は、速やかに抜き取る（写真1）。
- ③ハマダイコン（アブラナ科越年生）の莢が大麥の収穫物に混入する事例が昨年報告されている。収穫後の選別が困難であることから、ほ場やその周辺で見かけたら速やかに除去する（写真2）。



写真1 大麥に絡みついたカラスノエンドウと種子（3mm程度）



写真2 大麥ほ場畔に植生するハマダイコンと種子（3mm程度）

### (4) 赤かび病等被害粒混入防止の徹底

- ① 刈取り直前に必ずほ場を巡回し、赤かび病等の発生の有無を確認する。
- ② 赤かび病等の発生が認められるほ場は、別扱いにして、被害粒の発生していないほ場の後に刈取り乾燥を行うとともに、荷受時のチェックを徹底する。
- ③ 刈取った麦は、直ちに乾燥するとともに、選別の徹底により、被害粒を確実に除去する。

### (5) 適期での刈取り

- ① 地域やほ場ごとに成熟期を確認し、適期の収穫作業に努める。
- ② 生育が早まっているので、コンバインや乾燥調製施設等の準備は、遅れずに行う。
- ③ 成熟期に近づくと、大麥の子実水分は急激に低下するので、子実や茎葉の黄化状況を確認し、子実水分30%以下となったほ場から適期に刈取る。
- ④ 早刈りは粒の充実が不十分で空洞粒となり易い。また、刈遅れは熟色不良となり易いので、穂首が折れる前に刈り終える。
- ⑤ 成熟ムラの大きいほ場では、空洞粒の発生が懸念されるので別扱いとする。
- ⑥ 刈取り後は、直ちに（4時間以内）乾燥機に張り込む。

### (6) 適正な調製作業の徹底

- ① 整粒歩合80%以上に仕上げるため、2.3mmの篩目を使用し適正流量を守り、細麦等を除去する。
- ② 容積重690 g/L以上を確保するため、脱芒等を丁寧に行い精選する。